

農業技術

プリズム

農研機構が育成した桃「さくひめ」は早生で低温要求量が少なく、暖冬条件下でも安定して生産できる品種として、本県をはじめとした西南暖地での普及が見込まれています。しかしながら、樹勢が強く、花芽がつきやすいため、着果過多となり、果実肥大が劣る結果となります。そこで、果実の大きさに注目し、果実重と糖度の関係を調査しました。

無加温ハウスに植栽した「さくひめ」では、収穫時の果実が大きいほど糖度が高い傾向にあり、糖度12以上の高糖度果実の割合は、果実重250g以上では6割程度でし

た。一方、200g～250gでは2割程度、200g未満では1割以下と果実が小さいほど糖度が低く、果実重20

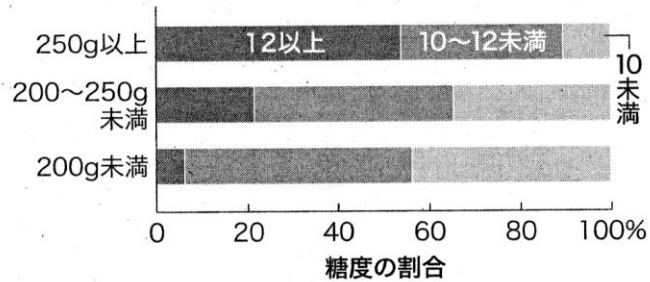
桃「さくひめ」の果実重と糖度

果実大きいほど高糖度 早期の予備摘果が重要

0g未満では10未満の低糖度果実の割合が高くなりました。

このように、果実の大きさ

桃「さくひめ」の果実重別の糖度割合



と糖度の関係性が強い「さくひめ」で高糖度の果実を生産するためには、着果過多にならないように気を付けるとともに、「日川白鳳」よりも早期からの予備摘果作業が重要になります。

(長崎県農林技術開発センター 果樹・茶研究部門ピフ・落葉果樹研究室 主任研究員 川良将一朗)